＜新しい能力＞論への問い
―アフリカでの調査から見えてくるもの―

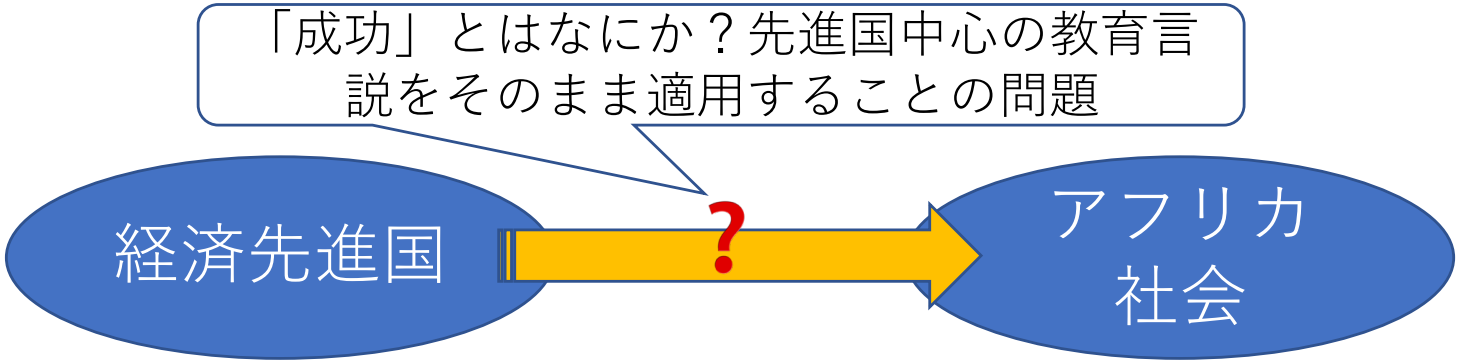
近藤菜月

名古屋大学

前回報告との関連

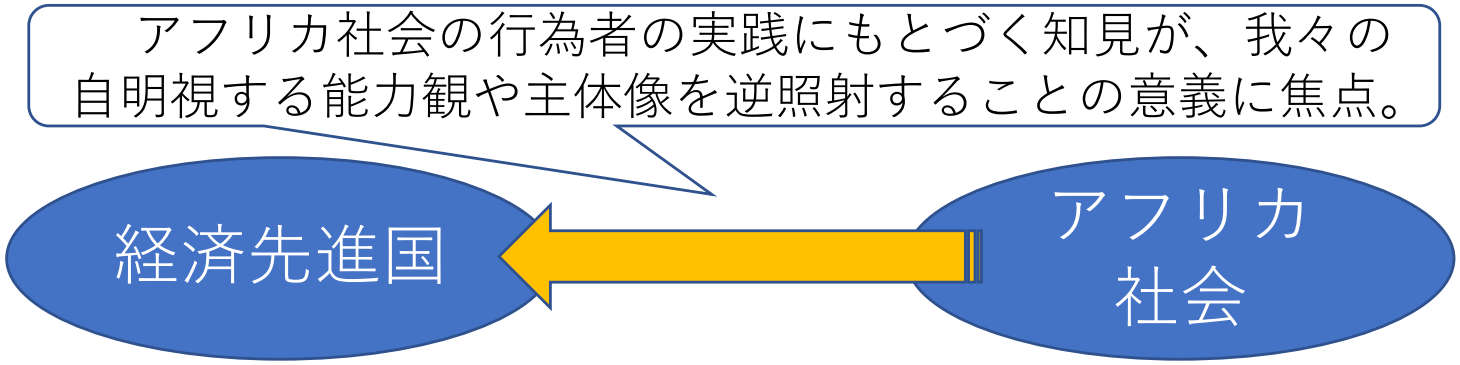
- 前回のJASID企画セッション「産業人材の技能形成と非認知能力」にて

1. 「非認知能力」の議論は多くの分野に跨り、立場によって異なる文脈で論じられる。
2. 教育経済学においては、「アウトカム」は収入、持ち家、正規雇用等の西欧近代的な「成功」と規定されており、それに寄与するような能力・資質に考察が限定されている。



本報告の概要

- 本報告は、近年の教育言説全体（「新しい能力」）を考察の対象とする。
- 「新しい能力」登場の背景を説明する際のキーワードである、「不確実性」に着目する。
- アフリカ社会の人々の「不確実性」への対処に焦点をあてることを通して、システムの安定性が崩れ、予測が困難な現代社会への向き合い方に関する、より柔軟な在り方を探ることの可能性を提示する。



＜新しい能力＞概念の展開と差異

- 1990年代以降、世界中の教育目標に様々な「新しい能力」（松下2010）概念が登場
  - OECDの社会情緒的スキル、OECD=DeSeCoのキーコンピテンシー、21世紀型スキル
  - 各国の教育目標
    - ✓ （日本:「ゆとり」の中で「生きる力」を育む（1996））

「新しい能力」の展開と差異

- 1990年代以降、世界中の教育目標に様々な「新しい能力」（松下 2010）概念が登場
  - OECDの社会情緒的スキル、OECD=DeSeCoのキーコンピテンシー、21世紀型スキル
  - 各国の教育目標
    - ✓ （日本:「ゆとり」の中で「生きる力」を育む（1996））

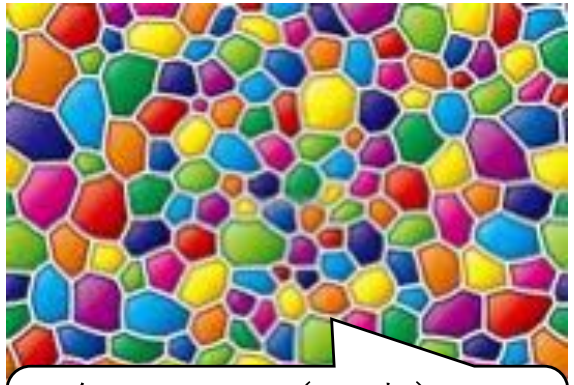
- 「新しい能力」の基本構造（松下 2010）
  1. 基本的な認知能力
  2. 高次の認知能力
  3. 対人関係能力
  4. 人格特性

「新しい能力」の展開と差異

- 「新しい能力」の2つのアプローチ（松下 2007）

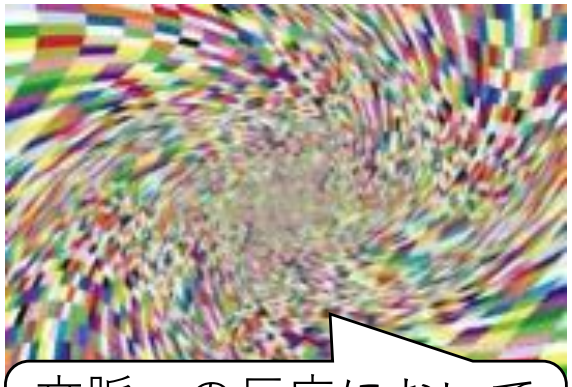
①	行動主義的	要素還元主義的	脱文脈的
②	統合的	ホリスティック	文脈的

①



各スキル（要素）の
モザイク

②



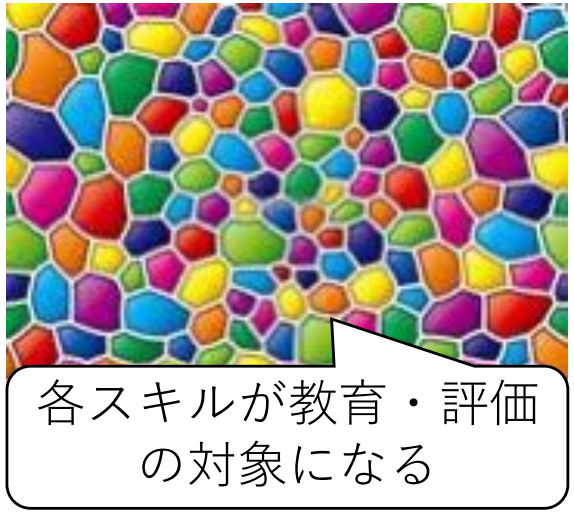
文脈への反応において
混然一体となって表出

「新しい能力」の展開と差異

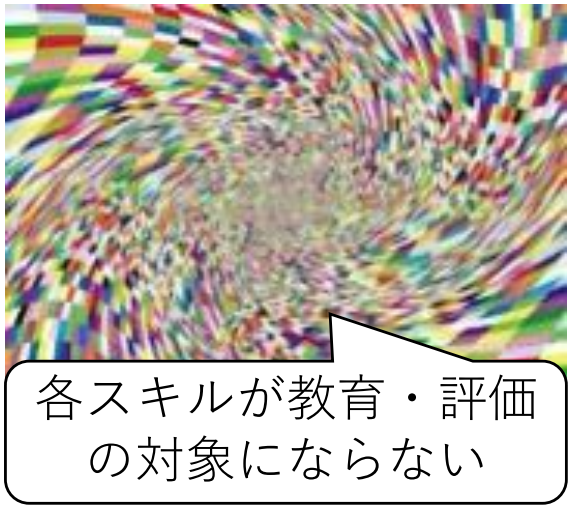
- 「新しい能力」の2つのアプローチ（松下 2007）

①	行動主義的	要素還元主義的	脱文脈的
②	統合的	ホリスティック	文脈的

①



②



「新しい能力」の展開と差異

- 「新しい能力」の2つのアプローチ（松下 2007）

①	行動主義的	要素還元主義的	脱文脈的
②	統合的	ホリスティック	文脈的

①

② OECDのキーコンピテンシー

「新しい能力」の展開と差異

- 「新しい能力」の2つのアプローチ（松下 2007）

①	行動主義的	要素還元主義的	脱文脈的
②	統合的	ホリスティック	文脈的

①

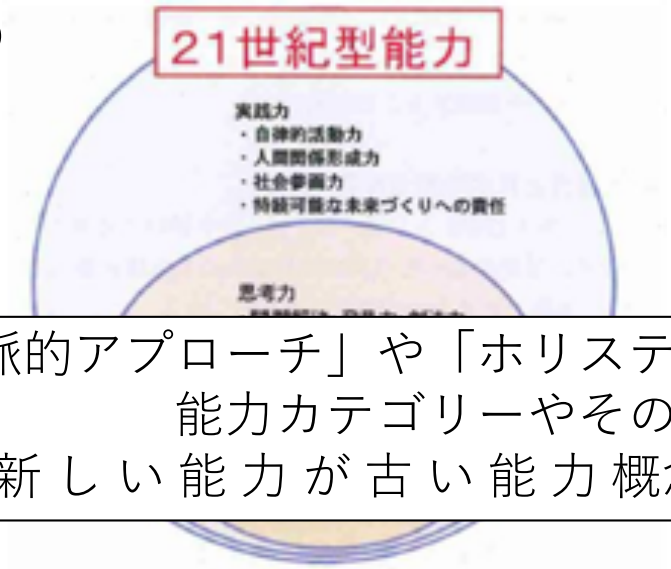
② OECDのキーコンピテンシー

「新しい能力」の展開と差異

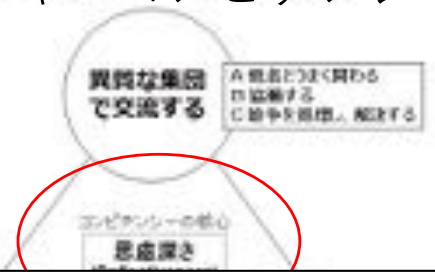
- 「新しい能力」の2つのアプローチ（松下 2007）

①	行動主義的	要素還元主義的	脱文脈的
②	統合的	ホリスティック	文脈的

①



② OECDのキーコンピテンシー



「文脈的アプローチ」や「ホリスティックモデル」はほとんど注目されず、
能力カテゴリーやその指標化に注目が注がれる。
新しい能力が古い能力概念で評価される状況（福本 2014）

「新しい能力」への批判

1. 社会的な負の影響を危惧する批判
   - 人間の深くやわらかな部分まで含む全体的な能力を評価し、労働力として動員・活用しようとする<ハイパーメリトクラシー>の出現（本田 2005）
   - 現状の価値尺度への適応を求め、能力主義を助長（教育文化総合研究所　2019）

2. 「能力」の捉え方の妥当性に関する批判
   - 万能薬のように徘徊する「コミュカ」という妖怪（竹内 2017）
   - 能力の実体化・本質化批判（中村 2018）

単純化した能力概念が力を持ち続ける理由

- システムの不安定化によって生じる「不確実性」に、「確実性」の回復でもって対処しようとする傾向

➢ 「標準化された完全就業システム」から「柔軟で多様な部分就業システム」への移行に伴う個人化・流動化に対して、「一般的なコンピテンスを身にまとうことで、国境をこえ、分野の境界をこえて、個人的な人生行路を自らの手で編成していくことを期待されている」 (松下 2010: 9)

➢ 「人間の移動可能性の増大」や「コミュニケーションの不安定性」といった「不確実性が生み出す不安に対処するため」に、「安定」や目に見える「証明」への欲望が生じる⇒ 「能力」という発想が必要とされ続ける(樋口 2010)

➢ 情報化によって再帰性（reflexivity）が高まったことによる「能力不安（＝自分の能力がどの程度に位置づくかという「能力アイデンティティ」の揺らぎ）」⇒「新しい能力を求めなければならない」という強迫観念⇒「メリトクラシーの再帰性」が強まっている（中村 2018）。

単純化した能力概念が力を持ち続ける理由

- つまり…

➢ システムの不安定化に対するネガティブな反応が、個人の視点からも、（教育や雇用の）システム側からも論じられている。

➢ 現代社会に増加する「不確実性」を「リスク」・「危機」と見なし、「科学的に検証された「○○すればこうなる」という確実性の回復」を求める傾向によって、「能力」を実体化しようとする欲求はむしろ強まっている。（ポストモダンではなく、近代の徹底へ）

こうした傾向は「不確実性」の中で行為する行為者に寄与するのだろうか？

「不確実性」と「リスク」

- そもそも、「不確実性＝リスク」は克服すべきものか？
  - 山口（2018)は、ベックの議論では、リスク/安全という二項対立に基づいてリスクからの解放が可能であるかのように考えられていると批判する。

- 「リスク」と意思決定（山口 2018）
  - 最大限合理的な選択（＝安全）を求める事は、可能性（選択肢）の過多を前に立ちすくみ、行動不能（＝リスク）に陥ることにつながる。
  - 人は意思決定（他の可能性の排除）によって不確実性を吸収し、確実性（行動可能性）を手に入れる必要がある。確実性の確保は、結果の不確実性というリスクを引き受けてのみ可能となる。
  - 「リスク」は客観的実在ではない。チャンスというポジティヴな意味を持つものとしても捉えられる。

  ⇒「問題になり得るのは不確実性を締め出すことではなく、不確実性と向き合うこと」

「不確実性」と「リスク」

- 「不確実性」と向き合う行為者に寄与する議論とは？
  - 距離を置き、全体像を俯瞰した上での「分析者＝二次観察者」の立場に立つ専門家の議論は、「関与する行為者（＝一次観察者）」の行動の基礎にはなり得ない。（山口 2018）
  - 「経験的に検証された根拠や合理性が解体される状況におかれ、「選択の自由」が開かれたとき、各自が＜いま、ここ＞をどう生きるか
    ⇒「行為論的アプローチに基づく方法」（中村・鈴木 2020）

⇒安定したシステムが解体されたことへの防衛的な反応が目立つ先進国社会の議論。一方、システムがもとより脆弱で予測困難であることが前提である途上国社会では、人々は臨機応変な対処能力を発揮して不確実性の中から可能性を創出する。その経験や態度から学べることは？

「不確実性」と生きるアフリカの行為者

- アフリカにおける「不確実性」への対処の描写
  - 複数のシステムとの距離感（近藤　2018)
  - 「個人主義」と「開かれた互酬性」

投機性の高い挑戦をするタンザニアの商人らは生き残りを賭けて各々必死なのかといえば必ずしもそうではなく、彼らには「ゆとり」すらある。「確約」とは無縁である一方、他者の「得体の知れなさ」を「未知/不可知の可能性」として歓迎し、リスクを引き受けることで、逆説的に互酬性の好循環が生まれる在り方が提示される。（小川 2018）

  - 関係性・状況に応じて変化する流動的な主体像
  - 解釈に重点を置いた知識・能力観

真実の「Representation（写実）」ではなく、解釈に基づいて事象の意味を「Presentation(発表)」する能力（山田 2016）

⇒コミュニケーションの確実性や等価交換の安定性よりも、主体的解釈や意味付け、文脈依存性から豊かな選択を引き出す関係性や意思決定の在り方。

アフリカの行為主体への注目の意義

- 人類学的観点が欧米中心の教育議論にある「発達段階的まなざし」や「功利的まなざし」を相対化してきた（佐伯 2014）

- [新しい能力]欧米における議論の２つの傾向
  1. 強固なシステムやアイデンティティの基盤が不安定化することに対してリスクの回避や安定性の回復をめざす、防衛的・警戒的な態度
  2. 被害や損害の責任を、自分自身の意思決定や行為の帰結として引き受ける「強い個人」であることを要求する、マスキュリンな主体像

どちらも競争原理や能力概念の固定化につながる。このどちらとも違う方向性を描けるのではないか？

今後、考察・検討したい事がら

① 日本の＜新しい能力＞論と能力主義の基底に、不確実性に対する管理の欲求が存在するという視点の妥当性と、国際的に見られるものであるかどうか。

② 「不確実性」概念の精緻化。現代社会は不確実性が高まる社会であるということは現代社会論の共通認識であるが、この「不確実性」とアフリカの日常的実践における「不確実性」とを等価に用いることができるかどうか。

③ 「リスク」と「責任」、及び「意思決定」の関係について、欧米ではリスクと自由がセットとして扱われ、「自由からの逃走」（フロム 1952）か、自己責任の重みに耐えて生き抜く「強い個人」か、という二極化した議論の傾向が見られるのに対し、アフリカにおいてはそう見えないという見解の妥当性。

参考文献

- ウルリヒ・ベック（著）東連・伊藤美登里（訳）（1998）『危険社会 新しい近代への道』法政大学出版局.
- エーリッヒ・フロム（著）日高六郎（訳）（1952）『自由からの逃走』東京創元社.
- 小川さやか（2019）『チョンキンマンションのボスは知っている』春秋社.
- 菊地栄治（2019）「教育改革の「闇」ともう一つの物語～対話的空間を創る試み～」（教育文化総合研究所『能力論研究委員会報告書』）.
- 教育文化総合研究所（2019）『能力論研究委員会報告書』
- 近藤菜月（2018）『社会変動と行為者―「革命」期のガーナ農村部における民衆運動を事例として―』名古屋大学　博士学位論文.
- 佐伯胖. (2014). そもそも 「学ぶ」 とはどういうことか 正統的周辺参加論の前と後. 組織科学, 48(2), 38-49.
- 白水始, 遠藤貴広, 益川弘如, 松下佳代, 西野真由美, 後藤顕一, … & 福本徹. (2014). 「21 世紀型スキルとキー・コンピテンシー: いかに文脈的アプローチを実現するか (自主企画シンポジウム)」『日本教育心理学会総会発表論文集 第 56 回総会発表論文集』 120-121.
- 竹内洋(2017)『万能薬のように徘徊する「コミュ力」という妖怪　「近代型能力」あってこそ　社会学者、関西大学東京センター長・竹内洋』（産経新聞「正論」2017/4/3日付）
- 中村高康（2018）『暴走する能力主義―教育と現代社会の病理―』ちくま新書.
- 中村文哉・鈴木健之（編）『行為論から見る社会学』晃洋書房.

参考文献

- 樋口太郎（2010）「能力を語ること―その歴史的、現代的形態」（松下佳代（編）『新しい能力は教育を変えるか』）.
- 本田由紀（2005）『多元化する「能力」と日本社会―ハイパーメリトクラシー化のなかで―』NTT出版.
- 松下佳代（2007）「コンピテンス概念の大学カリキュラムへのインパクトとその問題点-Tuning Project の批判的検討」『京都大学高等教育研究』13: 101-120.
- 松下佳代（編）（2010）『新しい能力は教育を変えるか』ミネルヴァ書房.
- レイヴ＆ウェンガー (著) 佐伯胖（訳）『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書）
- 山口節郎（2002）『現代社会のゆらぎとリスク』新曜社.
- 山田肖子（2016）「解釈する能力と反復する能力」『アフリカ教育研究』7. 57-66
- Bowles, S., & Gintis, H. (1976). Schooling in Capitalist America . New York. Basic Books
- Heckman, J. J., & Rubinstein, Y. (2001). The importance of noncognitive skills: Lessons from the GED testing program. American Economic Review, 91(2), 145-149.
- McClelland, D. C. (1973). Testing for competence rather than for intelligence.. American psychologist, 28(1), 1.